「近代」の〝縮図〟　球磨郡深田銅山の歴史

——鉱毒問題から朝鮮人労働まで——

小松　裕

はじめに

私がここで紹介しようと思うのは、人口二三〇〇人たらずの小さな村にあったある銅山のことである。とうの昔に廃山になり、今は訪れる人もいない。地元の人々の話題にのぼることすらなくなってしまったような銅山である。なぜ私がこの忘れさられた銅山にこだわるのか。それは、この銅山の歴史の中にも、鉱毒問題と朝鮮人労働がみられ、日本の「近代」の一面が濃縮されているからである。

一九九三年一〇月三〇日、ある研究会の席上、農業史を研究されている犬童信義氏（一九二八年一二月一五日生まれ）より、次のようなお話しをうかがった。

小学校・中学校と球磨郡ですごしたが、小学生時代の一九三八、九年頃に、担任の先生から深田村の岩屋銅山に連れていってもらった。そこには、朝鮮人の飯場がたくさんあった。入坑していたのか朝鮮人の姿は見かけなかったが、ここで朝鮮人が「内鮮一体」でお国のために一生懸命働いているという説明を聞いた。川の水がものすごくきれいなのに、魚が

一匹もいないのが印象的だった。そのときの記憶が鮮明だったので、戦後になって色々と調べてみたら、一八七五年（明治八年）の資料にすでに岩屋銅山で鉱毒被害が発生していることがわかった、と。

それまで深田銅山の存在すら知らなかった私は、この話をうかがったとき、深田銅山は、鉱毒事件や朝鮮人・中国人強制労働で名高い足尾銅山のミニチュア版のような、その意味でまさに「近代」の〝縮図〟ともいうべきところではないかと直感した。そこで、早速、犬童氏と毎日新聞熊本支局の吉川友丈記者（当時）に同行願い、調査に赴いたのは、一九九三年一一月九日のことであった。

深田村に行く車中で、犬童氏より当時の思い出をうかがい、深田村では、村の文化財保護委員を勤め、『深田歴史考』（一九八三年）の著作もある深水一雄氏（一九一二年生まれ）のお宅で、深水氏から貴重なお話しをうかがった。そして、深水氏と、戦前の一時期、実際に銅山で働いていた小田定保氏（一九二〇年生まれ）に銅山跡を案内してもらい、そこで様々な説明を受けた。以下は、深田銅山の歴史について、それらの聞き取りや、その後の調査でわかったことをまとめたものである。

一　深田銅山の沿革

まず、深田銅山の沿革について、これまでに刊行された書籍の中にどのように記されているかをみておこう。

『日本の鉱床総覧』上巻（深水氏提供）によれば、次のようになっている。

一七〇四～三五年（宝永～享保時代）　相良藩で発見、稼行する。
一七四〇年（元文五年）　休山。
一八八一年（明治一四年）　上村健吾氏により再開。

一八九二年（明治二五年）　岩屋鉱山として稼行。
一九一三年（大正二年）　高田商会の経営になり盛んに稼行。
一九一八年（大正七年）　精煉所建設。
一九二三年（大正一二年）　不況により休山。
一九三〇年（昭和五年）　新望銅山と改称して採探鉱に着手。
一九四五年（昭和二〇年）　休山。
一九五一年（昭和二六年）　三井金属鉱業(株)深田鉱山と称して採鉱開始。
一九五四年（昭和二九年）　採鉱中止。
昭和一二年〜二〇年　算出粗鉱量三七、三九七t、品位不明。

深水氏からいただいたコピーには、最後に、手書きで、「昭和四九年一月　三井金属鉱業(株)消滅登録、鉱区放棄」と書き込まれている。

また、一九四一年八月二五日発行の『球磨郡誌』（犬童氏提供）には、「新望銅山」と題して、次のような記述がある。

新望銅山は深田村にあり、宝永・享保の頃相良公の経営に属し数十年隆盛を極めしと云ふ。其の後廃鉱となり明治七、八年、十三年、三十年試掘願をなし大正六年高田商会の経営により隆盛となり、一時製煉業をもなしたるも大正十四年休鉱し、其の後昭和六年二月貝谷真孜氏之を経営して今日に及ぶ。

（中略）現在資本金二百万円、役員十五名、労務者二百名を有するも、昭和十二年六月よりは資本金を四百万円に増して一日五十噸を産出する機械選鉱場を設置し、更に圧縮空気による鑿岩機数台を使用し掘鑿を急ぎつゝある。

「近代」の〝縮図〟　球磨郡深田銅山の歴史（小松）

鉱石の含有量は相当のもので三パーセントである。鉱脈は縦横に走り水準下二百四十尺に達している。埋蔵量は無尽蔵ともいふべく原鉱は佐賀県製煉所に送りてゐる。銅鉱は含銅硫化鉄鉱にして黄銅鉱、自然銅等を産出する。（二八四頁、なお原文の旧字体は新字体に改めた）

深水氏の『深田歴史考』の中の深田銅山に関する記述は、おそらく、この『球磨郡誌』をもとにまとめられたものと推測できるが、銅山の開鉱に関しては次のような説が紹介されている。

この銅山の開鉱には諸説ある。既に豊臣秀吉時代（桃山時代）には開鉱していたという（鷲巣の中村初吉さんの話）。又、江戸時代にはいり、寛永八年（一六三一）、或は、元禄十四年（一七〇一）が発掘のはじまりであるという説もあってはっきりしていない。しかし、宝永、正徳、享保年間（一七〇四～一七三五）の頃になると発掘が隆盛になり、延享四年（一七四七）に一時休鉱になったことは史実として記録されている。（一五三頁）

その後、『深田村誌』が一九九四年四月に刊行され、その中にも深水氏の手によって深田銅山の沿革がまとめられているが、とりあえず以上の三点の文献を比較対照してみると、若干の差異がみられることに気づく。

第一に、江戸時代に休山になった時期が、『日本の鉱床総覧』では一七四〇年に、『深田歴史考』では一七四七年になっていること。第二に、高田商会が経営するようになった年代が、『日本の鉱床総覧』では一九一三年に、『球磨郡誌』『深田歴史考』では一九一七年になっていること。第三に、高田商会が採掘を止めた年が、『日本の鉱床総覧』では一九二三年に、『球磨郡誌』『深田歴史考』では一九二五年になっていること。第四に、新望銅山と改称された年が、『日本の鉱床総覧』では一九三〇年に、『深田歴史考』では一九三七年になっていること、などである。

このような年代の差異については、のちに鉱山史研究の基本的な資料をもとに検討することにして、ここでは、『球磨郡誌』で、深田銅山の鉱石は「佐賀県製煉所」に送られたとあるのが、大分県の「佐賀関精錬所」の明白な誤りであることを指摘するにとどめたい。(1)

以上のような記述から、深田銅山が隆盛を誇ったのは、江戸時代の一時期を除けば、第一次世界大戦、第二次世界大戦の時期であったことがわかる。これも、銅という金属の性質に由来するものであろう。『深田歴史考』の記すところによれば、第一次世界大戦の「時代には、銅山周辺の空地には、官舎や住宅が立ち並び、遠く免田村からも商店が出張販売し、人口も密集し一時は小学校の分教場設置の噂も立った」(一五五頁)ほどの賑わいをみせたという。なにしろ、現在でも人口二三〇〇余の村であるから、村の経済にとって、従業員だけで二〇〇名以上、その家族も含めれば七〇〇名以上にも及んだとされている最盛期の銅山の影響は多大なものがあったろうと推測できる。しかし、その深田銅山も、一九四四年七月の水害により、「鉱坑及び選鉱場など、主要施設は埋没し、再起不能となった」(同前、一五三頁)。戦後は、三井金属鉱業が試掘したが、早々に撤退し、その後、一九八二年になって、「某会社から旧深田銅山の鉱区をはじめ、須恵村、相良村にまたがる三四七〇五アールに及ぶ、範囲を鉱床として、金、銀、銅鉱の鉱業出願があった」が、承認されないまま、現在にいたっているということである(同前、一五五頁)。

二　深田銅山の鉱毒問題

深田銅山から流出する鉱毒について記された最も早い記録が、一八七五年(明治八年)に求麻郡地誌調掛の高田苗清(にしきよ)・渋谷得蔵によって報告された草稿を編纂した『肥後国求麻郡村誌』(一九七五年九月、熊本女子大学歴史研究部発行、青潮社出版。この資料も犬童氏の提供による)である。その「明治八年乙亥五月肥後国求麻郡第十四大区六小区深田村地誌」の項には、次のように記述されている。

「近代」の〝縮図〟　球磨郡深田銅山の歴史(小松)

「近代」の〝縮図〟　球磨郡深田銅山の歴史（小松）

銅山川　巾七間　深四尺　洪水三尺

此水源岩屋山ヨリ出デ元禄年間此山ニテ銅ヲ堀リ其後漆喰ヲ以テ堀口ノ周囲ヲ塗レドモ堀穴ヨリ水溢レ出テ銅山川ニ入リ水色赤ク魚類死スト云堰アッテ田地ノ用水トナル流末求麻川ニ合ス洪水ノ節ハ銅穴ノ水溢レ出ツ里民田地ノ水口ヲ留メ銅水ノ害ヲ防クト云（一四二頁）

また、次のようにもいう。

字岩屋山

銅鉱堀跡一ケ所

是ハ元禄年間銅ヲ堀リ其跡漆喰ヲ以堀口ノ周囲ヲ塗レドモ堀穴ヨリ水溢レ出テ銅山川ニ入ル銅鉱ニ礬石ヲ含ミ川底赤色ヲ帯ビ草生セス魚類死スト云（一四三頁）

以上の記述から、深田銅山の坑口から流出する鉱毒水による銅山川の魚や沿岸の田地への被害が、すでに一八七五年の時点で顕在化していることがわかる。また、洪水の場合には、鉱毒水が田に入らないようにあわてて水口を塞いだというのであるから、沿岸の農民にはそうした対策が長年にわたり経験知として蓄積されていたことが推測でき、それ以前に、おそらくは江戸時代から何度も鉱毒の被害をうけていたことを示唆している。

後者の資料に「礬石」（ばんせき）という言葉が出て来るが、これは「胆礬」（たんばん）ともいい、水中に生ずる硫酸銅からなる鉱物のことであると思われる。『日本地方鉱床誌』第九巻「九州地方」（朝倉書店、一九六一年）には、「多量の

硫酸銅を溶解している銅鉱山の坑内水」の中に「鉄片を入れると銅は鉄を置換して金属銅として沈澱」すると述べられているが（二五六頁）、深田村の特産品にも上げられていたこの「礬石」とは、このようにして自然にできた鉱物のことであろうか。また、このこと自体が、銅山から流れる川の水の毒性の強さを物語っていよう。

『肥後国求麻郡村誌』の他に鉱毒被害の事実が記録されている資料は、一九二七年（昭和二年）五月六日の『人吉新報』の記事がある。深田村の蓑田雪（すすぎ）という土壌改良の先駆者のことを紹介した記事で、その中に次のような記述がある（この資料は、深水氏に提供していただいた。深水氏は、この資料を所蔵していた球磨地方の郷土史研究の大家・故髙田寮次氏からコピーをいただいたそうである）。

深田銅山より流出する酸性毒素の為に同村の水田数十町歩が水稲に困難するのみならず、麦の如き殆ど収穫を得る事の出来ない処よりその対策として同毒素の化学的予防、土壌の改良等にその全精力を傾注し各種の調査研究をなし此の方面実に卓越したる識見と造脂（ママ）とを有してゐる。（傍線小松）

深水氏のお話しでは、銅山川の下流で「井手」から水を引き、「ヌキ」で山を通して、深水氏が居住する古町あたりの田畑を潅漑していた（このことは、文化一〇年＝一八一三年の「古地図」でも確認できる）が、やはり、他の田畑と比べて収量が少なかったという。そのため、蓑田は、「天地返し」（土地の下の方の土と表面部分の土を入れ換える）や、中和させるための石灰の投入などを行っていたということである。

以上は、昭和初期のことであるが、深水氏の子どもの頃も、夕立があると、真っ赤になった銅山川の水が球磨川に流れ込み、球磨川の流れに赤い筋状の帯ができ、鮎が狂ったように死んだそうである。だから、当時、子どもたちは、夕立があると鮎が死ぬのを待ってつかまえるのを楽しみにしていたという。こうしたエピソードから、大正から昭和にかけても鉱

毒の被害が継続していたことが推測できる。

実は、鉱毒事件で有名な足尾銅山の場合、鉱毒による被害、とりわけ鮎の大量死が最初に新聞で報道されたのは、一八八五年（明治一八年）八月一二日の『朝野新聞』の紙面においてであった。確かに、足尾でも、銅山近辺の村々の農作物に対する被害は江戸時代から確認できる。しかし、鉱毒被害が顕在化したのは、足尾銅山で有望な鉱脈が発見され、生産量が格段に増大する一八八四年以降のことであり、その意味からも、一八七五年の資料に既に鉱毒被害が記載されている深田銅山は、近代日本の公害（鉱毒）史上、最も早い事例に属するといっても過言ではないだろう。そして、足尾銅山の鉱毒被害に苦しむ渡良瀬川沿岸の農民たちがとった対応策も、その初期のころは、やはり「天地返し」や石灰の投入であった。しかし、そのような方法では鉱毒被害を根絶することができなかったために、被害農民たちは、鉱毒反対＝足尾銅山操業停止運動に立ち上がったのであったが、深田村の場合、「天地返し」などの効果はどうだったのだろうか。確証はないが、蓑田は、足尾鉱毒事件からヒントを得て、それを自分の村に応用しようと考えたのかもしれない。

また、精錬所からでる煙りによる被害（煙害）も、足尾銅山の場合は深刻で、松木村という村がそのためになくなり、現在でも足尾の山々の緑はなかなか回復しないままである。ゴツゴツした岩肌を剝き出しにして、訪れる人を、荒涼たる気分にさせる。同様に深田銅山でも煙害が発生し、はげ山になったところがあったことは、深水氏や小田氏の証言から確認できるところである。

以上のように、深田村でも、田畑の農作物や鮎などの魚類、さらには山々の樹木に対する被害がかなり発生していたにもかかわらず、なぜそれが村をゆるがすほどの問題にならなかったのであろうか。こうした疑問を、私は、率直に深水氏にぶつけてみた。その答えは、「反対運動はほとんどなかった」ということであった。深水氏の家の田も、銅山川から水を引いており、収穫は確かに少なかったろうが、反面、銅山に勤めている村民も多く、舟運も盛んになり、最盛期には免田村からも商店が出張してくるほど、銅山によって村全体が潤ったから、というのがその理由であろうということだった。

前述したように、たしかに、深田村に占める銅山の比重は大きかった。足尾鉱毒事件の場合は、被害が、足尾銅山からずっと下流の沿岸地帯に集中し、足尾銅山と利害を共にするということはほとんどなかった。そのことが反対運動をやりやすくしたという一面も、確かに否定できない。現に、足尾町の住民は、古河が経営する足尾銅山に対して期限付きの鉱毒予防工事命令が出されたとき、たくさんの人が手弁当で工事を手伝っている。今ふうに言えば「企業城下町」的な性格が強かった。深田村の場合も、足尾銅山に対する足尾町の関係に類似するところがあったと考えられる。

ただ、隣接する五木村の五木銅山では、一八九九年（明治三二年）三月一一日に、板木地区の佐藤忠作外七名の農民が、村長にあてて、煙害による被害の補償を会社側に請求してもらいたい旨の「御願」を提出していることが明らかになっている。[3] 深田村でも、こうした動きがなかったかどうか、今後、綿密な調査が必要であろう。

さらに、有害な水と煙が銅山で働く鉱夫たちの健康を脅かしていたことも資料的に確認できる。深田銅山では、鉱夫一三九名が、一九一八年（大正七年）八月九日から一一日まで同盟罷業をしているが、鉱夫たちが提出した五項目の「請願書」の中に、「銅山は煙害及び水質悪き為め病気多し故に公傷以外の病気に対しても薬価全部を事務所より支払ふて貰ひたき事」という一項が掲げられていた。[3] 鉱山の労働者の側も鉱害の存在を明らかに認識し、自分たちもその被害者であると位置づけていたことは、公害問題史上特筆に値するものである。なぜなら、鉱毒の原因企業の労働者と被害者である村民たちとの共闘の可能性が成立していたことになるからだ。しかし、現実の歴史過程では、村民たちの抗議行動がみられなかったのと同様に、労働者と村民の共闘関係も成立しなかった。その理由は、おそらく、前述した「企業城下町」的な意識のありように加え、明治以来、深田銅山の操業期間が断続的かつ短期的であり、その結果、被害が足尾鉱毒事件ほど深刻化しなかったことが最大の理由であろう。自分の力ではどうにもならないギリギリのところまで追い込まれなければ、被害民はなかなか立ち上がらないものなのである。

なお、深田銅山では、一九六九年に、三井金属串木野鉱山株式会社工作課によって、坑口閉塞・鉱滓移転等の鉱毒防止

工事が行われているようである。[4]

三　高田鉱業時代の深田銅山

鉱山史研究の基礎的な資料に、『本邦鉱業ノ趨勢』と『鉱区一覧』がある。『本邦鉱業ノ趨勢』（以下『趨勢』と略記）は農商務省鉱山局（のち商工省）が、また『鉱区一覧』（以下『一覧』と略記）はそれぞれの地方管区毎の鉱山監督署（深田銅山の場合は福岡鉱山監督署、のち、一九一三～二四年版が福岡鉱務署、一九二五～四三年版が福岡鉱山監督局に改まる）が毎年刊行していた報告書である。以下、この二つの資料をてがかりに、深田銅山の最盛期の様子を明らかにしてみたい。

深田銅山の鉱業権者として高田商会の名が『一覧』に登場するのは、一九一七年からである。そこには、「合資会社高田商会外二名」とある。いっぽう、一九一七年の『趨勢』にも、「新ニ事業ニ着手シタル鉱山」として「岩屋鉱山」が紹介されている。それを全文引用してみよう。

本鉱山ハ幾多鉱業権者ノ交代稼業セル所タリシモ大正四年以後殆ト休業シ僅ニ旧坑ノ小鍋ヲ逐フテ掘進中隣接坑道ニ貫通シタル時多量ノ溜水迸出シ之カ排水ニ施業中宏大ナル石ノ存在セルヲ認メタリ亦最底部ノ鉱層断絶シテ石英出顕セシカハ之ヲ更ニ逐フコト数十尺ニシテ下磐ナル千枚岩ニ沿ヒ鍋幅四尺余ノ品位優良ナル鉱石ヲ発見シタリ依テ坑内ノ排水ニ着手シ同時ニ旧坑道ノ改修ヲ施シ其方面各々延先キノ探鉱ヲ為シ五月全排水ヲ了ヘ採鉱ニ努メ稼業続行スルニ至リシモ坑内湧水多量ナルヲ以テ之レカ排水坑道（約八百尺）ヲ開鑿セントシ七月ヨリ着手シ大正七年十月竣成ノ予定ナリ

機械ノ新設トシテハ事業再興ニ伴ヒウォーシントン型ポンプ（内径十吋）三臺「タクマ」式蒸汽汽罐五十馬力一臺及三十馬力ノモノ一臺ヲ設置シ坑内外ニ九封度軌条及木製軌条ヲ以テ延長約二千七百尺ノ軌道ヲ敷設セリ（一八五～六頁、

傍線原文）

また、二五九頁には、「岩屋銅山　高田鉱業株式会社　二月事業ニ着手」とあるので、深田銅山の鉱業権が高田商会に移り、採掘事業を開始したのは、一九一七年の二月と断定していいだろう。

高田商会は、高田慎蔵が一八八一年に創設した貿易商社で、おもに機械や船舶の輸入販売に力を入れていたが、海運・土木建築・不動産取引・鉱山業などにも事業を拡大していった。実業之世界編輯局撰『財界物故傑物傳』下（一九三六年六月）の「高田慎蔵」の項には、日清・日露をへた同商会の発展ぶりが次のように描かれている。

「さきに日清戦争あり、次いで日露戦争の起るや、彼は川村、山縣、大山等軍部諸星の信任を得、大倉組と拮抗して巨利を占め、日露戦争当時彼の財産は約二千万円と称へられた。かくて高田商会の繁栄は進むこと坦として砥の如く、天下にその泰平を謳はれ、わが貿易商中の一勢力として覇を唱ふるに至ったが、四十一年組織を改めて合資会社となし、大正元年表面の責任を蕨子釜吉に譲り、大番頭田口義三郎をしてこれが輔佐に当らしめ、自らは高田商会及び高田鉱業の顧問として両社幹部を誘掖策励した。」（四四～五頁）

ところが、一九二一年の慎蔵の病没とともに、小規模な財閥コンツェルンにまで発展していた高田商会も急速に没落することになる。折からの恐慌の打撃に加え、関東大震災による輸入品在庫の焼失と震災後の為替の下落により、二千数百万の損失を出して、一九二五年二月二十一日に休業のやむなきにいたったとされている。(6)

それでは、高田鉱業時代の深田銅山の産出高と、高田鉱業全体に占める深田銅山の位置を、次の表を参考に探ってみよう。

まず、表1をみていただきたい。『趨勢』から、一九一八年から一九二一年までの産出高と価額が判明する。「銅」と「銅鉱石」と表示が別れているのは、精錬したものとそうでないものとの区別なのであろうか。「斤」「貫」という単位の

違いをトンで統一するならば、一九一八年は銅が一九三・四トン、一九一九年は銅が一一・三トンで銅鉱石が五八九四・四トン、一九二〇年は銅鉱石が七四一四・二トン、一九二一年は銅鉱石が四五五九・六トンとなる（一斤＝〇・〇〇六トン、一貫＝〇・〇〇三七トンで計算）。深田銅山の銅鉱石は、含有量が、大体三パーセント前後といわれていたから、一九一九年から二一年までの産出銅鉱石から含有量を割り出すと、それぞれ、一七六・八トン、二二二・四トン、一三六・八トンとなり、すべてを銅で換算すると、一九一八年一九三・四トン、一九一九年一八八・一トン、一九二〇年二二二・四トン、一九二一年一三六・八トンとなる。

以上のように、産出高のピークは一九二〇年であったことがわかるが、価額の最高は一九一八年になっている。これは、第一次世界大戦の終了後、銅の需要が激減し価格が暴落したことによっている。たとえば、一九一九年の『趨勢』の第七章「鉱山事業ノ概況」の「銅鉱業」の部分に、「休戦以来各国ノ需用殆ト皆無ノ姿ニシテ生産過剰ヲ来シ市況日々非ニシテ価格ノ暴落趨ク所ヲ知ラス一方燃料其他ノ物価奔騰シ賃銀ハ著シク高上シ為メニ生産費ハ膨張シ経営甚タ困難トナリ従テ事業ヲ縮少シ或ハ休山スルモノ相踵キ新ナル鉱山又ハ拡張ヲ起畳スル者甚タ少ク我カ銅界ノ為メニ甚タ悲シムヘキ現象ヲ呈セリ」（一二九～一三〇頁）と記してあるように、深田銅山は、高田鉱業が再開発に乗り出し採掘を始めた直後に世界的な銅不況の波をまともにかぶって

表1　高田鉱業時代の深田銅山の産出高（1918-24）

年	銅		銅鉱石		価額計
	産出高(斤)	価額(円)	産出高(貫)	価額(円)	(円)
1918	322,379	188,269			188,269
1919	18,828	9,131	1,593,085	143,076	152,207
1920			2,003,846	134,858	134,858
1921			1,232,333	135,653	135,653
1922					
1923					—
1924					—

《備考》『本邦鉱業ノ趨勢』より作成。なお、大正11年（1922年）版は、国立国会図書館にも所蔵されておらず、未見である。

しまったことになる。

その結果、深田銅山は、きわめて短期間のうちに、再度休業に追い込まれてしまうことになる。『趨勢』の一九二二年版を見ることができていないので、はっきりとしたことはいえないが、すでに一九二一年版には「熊本県岩谷鉱山等ハ遂ニ精錬或ハ採鉱ヲ中止シ」と出ているので、一九二二年か、おそくとも一九二三年には操業を全面的に停止したものと考えられる。(6) 一九二三年版の『趨勢』には、岩屋銅山の名は、どこにも見当たらない。ただ、鉱業権自体はまだ高田鉱業が所有していたようで、鉱業権が西尾豊という人物に移るのは、一九二五年の『一覧』からである。

それでは、このような深田銅山の位置を、表2から探ってみよう。表2からすぐわかるように、高田鉱業の基幹鉱山は何といっても宮城県の高田鉱山であった。高田鉱山は、銀と鉛と亜鉛を産出していたほか、大規模な亜鉛の精錬所を有しており、北海道の広尾鉱山や群馬県の八幡鉱山などから産出される亜鉛鉱石の精錬もおこなっていた。そして高田鉱山に次ぐ位置をしめるのが、徳島県の高越（こうえつ）鉱山で、含銅硫化鉄鉱石を毎年三〇〇〇トン前後産出していた。この二つの鉱山を中心に、高田鉱業は、当時の日本の産銅業界で急速にのし上がり、第一次世界大戦の末期に

表2　高田鉱業所有鉱山産出価額の変遷（1917-25）

	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925
広尾	16,759	4,840	176		42,713				
(北海道)	0.5%	0.14%	0.007%		3.6%				
大正									203,538
(宮城)									100%
神川			37,783						
(山形)			1.5%						
高田	2,807,082	2,590,851	1,808,462	1,748,197	934,211		398,616	375,121	
(宮城)	83.1%	76.9%	73.2%	76.0%	78.0%		49.9%	48.1%	
八幡	4,100	2,884	2,705						
(群馬)	0.1%	0.1%	0.1%						
日吉	76,384	69,713	21,510						
(岡山)	2.3%	2.1%	0.9%						
金生	40,503	38,956							
(岡山)	1.2%	1.2%							
高越	419,169	473,616	446,935	418,394	84,683		397,523	404,259	
(徳島)	12.4%	14.1%	18.1%	18.2%	7.1%		50.1%	51.9%	
周防	15,398								
(山口)	0.5%								
岩屋		188,289	152,207	134,858	135,653				
(熊本)		5.6%	6.2%	5.6%	11.3%				
合計	3,379,395	3,369,109	2,469,820 (2,469,828)	2,301,419	1,197,460		794,139	779,380	203,538

（備考）『本邦鉱業ノ趨勢』各年版より作成。ただし、1922年版は、国会図書館にも未所蔵のため、未見。
各鉱山の上段の数字の単位は、円。下段は高田鉱業所有鉱山産出価額の合計に占める割合を表す。
1917～19年の合計の数字は、『本邦鉱業ノ趨勢』中の「鉱産出頂三十（五十）万円以上ノ鉱業権者」の一覧表からとったが、明白な計算間違いとわかる1919年分は（　）内に訂正しておいた。

は、産銅業界のビッグ5といわれた久原鉱業・古河・藤田組・三菱・住友合資に次ぐ地位を三井鉱山などと分けあうまでにいたっている。[7] 深田銅山は、こうした高田鉱業にあって、高田鉱山・高越鉱山に次ぐ地位にあり、五％から一一％あまりの比率を占めていたことがわかり、その位置は、かなり重要なものであったことが判明する。

ところが、一九二三年四月に基幹鉱山であった高田鉱山の工場が全焼する事故があり、その影響か、高田鉱山の産出価額が急激に減少し、一九二五年には、高田・高越の両鉱山の鉱業権も共立鉱業に移転し、青森県の大正鉱山一つを残すのみとなっている。おおもとである高田商会の休業とともに、高田鉱業の歴史にも終止符が打たれたと考えられる。

ちなみに、高田商会時代の深田銅山の所長は、戦後に福岡三区から選出され、衆議院議員を五期つとめた田中稔男の父・田中稔であった。[8] 鉱夫数については、一三九人、[9] 二〇〇人[10]などの説があり、定かではないが、鉱山の規模や、後述する昭和戦前期の鉱夫数から考えて、多くても二〇〇人を越えることはなかったのではあるまいか。

四　「新望銅山」時代の深田銅山

深田銅山が第二次隆盛期を迎えるのは、鉱業権が貝谷真孜（かいたに・しんし）の手に移ってからである。その時期は、『球磨郡誌』によれば、一九三一年二月とあるが、『一覧』の一九三一年版にも貝谷の名が初めて「鉱業権者」の欄に登場して来る。

貝谷真孜は、一八七七年一〇月一二日に、熊本県人野田慶幸の三男として生まれた。野田慶幸は、郡長や税務署長などを歴任した後、細川家の顧問を勤めた人物といわれている。真孜は、二一才の時に貝谷弥三の養子となり、貝谷姓をなのるようになった。一八九九年七月に東京鉄道学校鉄道建設科を卒業したあと、鉄道作業局建設部、東京市役所をへて、一九〇〇年五月に熊本県に戻り、飽託郡道路組合嘱託、県水力電気調査助手、天草郡吏などを勤めた。その後、一九〇五年四月に三井三池炭鉱に入社。工手長、鉱務技士、建築技師、庶務事務員などを歴任して、一九二六年一〇月に退社。それ

以前に、一九二四年五月一〇日の第一五回総選挙に政友会から立候補して補欠で当選。また、一九三二年二月二〇日の第一八回総選挙に福岡第三区（久留米市・大牟田市・浮羽郡など筑後地方、定数五）から立候補して再び当選している。その後は、大牟田市議をつとめる一方、新望銅山株式会社を設立して鉱山経営に乗り出し、一九三七年一一月二日に死去している。[11]

『一覧』によれば、岩屋銅山が新望銅山へと名称を変更するのが一九三二年、鉱業権が貝谷真孜個人から新望銅山株式会社に移転するのが一九三六年である。とすると、新望銅山株式会社の設立は一九三六年と考えられるが、一九三四年と記されている資料も存在する。それは、『趨勢』の昭和一二年版（昭和一四年三月二五日発行）で、その「新ニ重要鉱山ニ列シタル鉱山」の項に新望銅山が掲げられ、次のように述べられている。

新望銅山　　採登第122号　　金銀銅硫化鉄
熊本県球磨郡深田村　　新望銅山株式会社

（1）交通運搬

熊本県人吉駅ヨリ湯ノ前ニ至ルノ支線ニテ免田駅ニ到リ之ヨリ県道ニテ約四粁北方ノ球磨郡深田村ニアリ、事務所ハ県道ヨリ岐レ鉱山道路約一粁ニシテ達ス鉱石ハ自動車或ハ馬車ニヨリ免田駅ニ搬出ス

（2）沿革

本鉱山ノ歴史ハ遠ク元禄時代ニ遡ルモノ、如ク大戦当時一時発展シタル事アルモ其後休止トナレリ、昭和五年ヨリ作業ヲ再開同九年本会社ノ経営トナリ今ニ及ベリ

（3）地質及鉱床

附近地質ハ秩父古生層ニ属スル粘板岩ニテ何レモ動力作用ヲ受ケテ皺曲ヲナス、鉱床ハ含銅硫化鉄鉱鉱床ニシテ前記岩

「近代」の〝縮図〟　球磨郡深田銅山の歴史（小松）

石ノ層理ニ平行ニ存シ、銀體ハ褶曲ニ従ツテ大小レンズ状ヲナシテ存シ、ソノ大ナルモノハ四m以上ニ達シ、平均一m乃至二mニシテ最上鉱ハ品位銅五乃至六％硫黄四五％平均ニテ銅三乃至四％硫黄四〇％アリ、常ニ少量ノ閃亜亜鉛鉱ヲ随伴稀ニ金銀ヲ伴フ事アリ

（4）操業ノ概況

主要坑口ハ新盛坑、本坑、斜坑、第二坑斜坑第二坑の四坑ニシテ採鉱ハ上向階段堀ニシテ薄層ノ場合ハソノ廃石ハ採堀跡ニ充塡シ採堀ニハ手堀又ハ鑿岩機ヲ使用ス、一ヶ月採掘粗鉱高ハ約一〇〇〇瓲ニシテ銅ノ品位ハ二％、鉱夫数ハ坑内外ヲ合シ一九六名ナリ（一五三～四頁、傍線小松）

この『趨勢』の記述によれば、新望銅山株式会社の設立が一九三四年であるばかりでなく、貝谷が深田銅山の操業を再開しつつあったのも一九三〇年と読むことができる。また、『深田村誌』が紹介している『重要鉱山新望銅山概要説明書』にも、貝谷が経営権を譲り受けたのが一九三〇年一二月、新望銅山を株式会社組織としたのが一九三四年四月、と記されている。[12]

新望銅山株式会社の設立が一九三四年であったらしきことは、外の資料からも窺うことができる。その資料とは、私が偶然にある古書店から入手した新望銅山株式会社の「営業報告書」等である。以下、この「営業報告書」等を元に、新望銅山の変遷と新望銅山株式会社の経営実態を探ってみることにする。

私が入手した資料は、以下のとおりである。

「定款」

「第六回営業報告書」　（昭和一二年六月一日～一一月三〇日）

「第七回営業報告書」（昭和一二年一二月一日〜昭和一三年五月三一日）
「第九回営業報告書」（昭和一三年一二月一日〜昭和一四年五月三一日）
「第一〇回営業報告書」（昭和一四年六月一日〜一一月三〇日）
「第一一回営業報告書」（昭和一四年一二月一日〜昭和一五年五月三一日）
「第一二回営業報告書」（昭和一五年六月一日〜一一月三〇日）
「第一三回営業報告書」（昭和一五年一二月一日〜昭和一六年五月三一日）

以上のように、「営業報告書」は年二回発行されていることがわかり、資料の性格上当然のことながら、それぞれ期間も定まっている。これを基準に、第五回、第四回・・・とさかのぼっていくと、「第一回営業報告書」（以下「営業報告書」の引用に際しては、回数のみを略記する）の期間は、昭和九年一二月一日より昭和一〇年五月三一日までとなる。「第一回」であるから、かならずしもこのとおりの期間とはならないかもしれないが、一応、一九三四年に新望銅山株式会社が設立された可能性を推測させるものといえる。「定款」をみると、刊行の日時は明記されていないが、住所は、「東京市麴町区丸ノ内二丁目二〇番地一（郵船ビルディング）新望銅山株式会社」となっている。ところが、『一覧』によると、新望銅山株式会社の所在地は、当初は、「東京市京橋区西六丁目六—一」になっている。しかし、「第六回」に、本社を丸ノ内に移転したことを昭和一二年九月八日に登記したことが記載されている。それらのことから、「定款」の発行は、昭和一二年中のことではないかと推測できる。「定款」によれば、資本金は四〇〇万円（設立当初は二〇〇万円であった）。一株五〇円の八万株である。取締役七名以内、監査役五名以内を置くものとし、取締役は二〇〇株以上、監査役は一〇〇株以上の株主の中から株主総会で選出すると規定されていた。役員の変遷は表3の通りである。

一九三七年、懸案の深田鉱業所の拡張工事が完成した。それまでにあった火薬庫、機関庫、選鉱場、貯鉱場三棟、分析

試験場、浴場、事務所二棟、倶楽部、役員社宅二棟、鉱夫社宅四棟、倉庫に加え、娯楽室、選鉱場、社員社宅三棟、鉱夫社宅四棟、倉庫、捲揚場二棟、空気圧縮機室、配給所などを増新築している（「第六回」）。また、一九三八年前期には、排水路や手選鉱場、機関庫、浮游選鉱機が完成し、増産態勢がいっそうととのっている（「第七回」）。

日中戦争の開戦にともない、従業員が

表3　新望銅山株式会社の役員の変遷

	氏名	1937 6・1	12・1	1938 6・1	12・1	1939 6・1	12・1	1940 6・1	12・1	1941 6・1
取締役	貝谷　真孜	→(11・2死去)								
	緒方　謙吉	(12・12)→								
	山田　重吉	→			……→					
	浅尾　誠一	→			……→					
	南波　礼吉		→(5・26辞任)							
	中山　真史	→					→(9・27辞任)			
	貝谷　和昭	→								
	下　剛次郎				……→					
	森　輝				……→					
	門倉　清祐				……→					
	伊藤　喬介					(8・21)→				
	村田　析						(12・29)→			
監査役	寺島　成信	→				→(4・18死去)				
	原　主一	→					→(8・21任期満了)			
	小池　義一						→			
	西田嘉兵衛					(8・21)→				
	高柳　康夫					(8・21)→				

《備考》第6、7、9～13営業報告書より作成。なお、貝谷和昭は貝谷真孜の長男で、1914年11月生まれ。

応召されるなどの影響をこうむったが（「第六回」）、銅輸入の制限により「銅饑饉ノ窮状愈々切ナルモノアリ」、鉱産資源の積極的な開発という「国策ニ順応シ積極的増産ヲ目的トシテ現在銅鉱日産五十噸ヲ百噸ニ、新ニ未開発ノ満俺（マンガン）、硫化鉱、耐火粘土ノ探鉱採掘等ヲ計画シ之ガ資金調達方法トシテ資本金ノ増加ニ付資金調整局ノ許可ヲ得テ倍額増資ヲ実現セリ」。利益率は二割一分三厘強、配当は一割二分を継続するという順調な経営ぶりであった。一九三七年一二月一日から翌年五月三一日までの稼行日数は一六八日、採鉱量は一二、四三五噸余（一日平均約七四噸）という。なお、社長の貝谷真孜が一九三七年一一月二日に死去したことにともない、代表取締役に、貝谷真孜の長女マキ（一九〇一年一月生まれ）の夫緒方謙吉が当選している（以上「第七回」）。

一九三八年五月三一日現在で、稼業している鉱山は深田銅山一ヵ所だけであったが、その後、新望銅山株式会社は五木村の平澤津鉱山を開発し、採掘をはじめた。『一覧』に平澤津鉱山の名前がはじめて登場するのは、昭和一三年七月一日現在のそれからであるから、一九三八年六月頃に採掘をはじめたものと考えられる。ただし、昭和一五年七月一日現在までの『一覧』では、平澤津鉱山の鉱業権の所有者は、貝谷真孜の妻の多美（一八八〇年八月生まれ、東京市世田ヶ谷区松原町二丁目七六五）の名義になっており、新望銅山株式会社の所有になるのは、その翌年版からである。

一九三九年に入ると、新望銅山株式会社は、優良なニッケルの鉱床が発見された平澤津鉱山の開発に全力を注ぐとともに、群馬県の赤城根鉱山の経営を引き受けたことが記され（「第九回」）、福島県南会津郡館岩村の鉱山を入手し、探鉱中であることが判明する（「第一〇回」）。さらに、一九四〇年には、福井県大野郡下穴馬村の巌洞鉱山を入手し、岡山県勝田郡豊並村の勝豊鉱山の経営を引き受けるなど、飛躍的に事業を拡大させていることがわかる。

このような経営方針の積極政策への転換は、一九三九年を境に、貝谷真孜社長時代の経営スタッフのほとんどが死亡、もしくは辞任して、経営スタッフが一新していることと何らかの関係があるものと考えられる（表3参照）。

なお、一九三九年から、深田・平澤津の両鉱山にたいして、政府から、採鉱奨励金が交付されている。

いっぽう、深田銅山の状況は、というと、一九四〇年はじめ頃に、「頗ル有望ナル富鉱帯ニ着鉱シタルニ付之ガ積極的採鉱準備ヲ整ヘ目下頻リニ採鉱中ナルガ漸次増産ノ傾向ニアリ」（「第一一回」）ということであったが、この年の「九月初旬、九州地方未曾有ノ大暴風雨ニ際シ、長時間ノ停電ニ依リ遂ニ下部坑内ニ滞水ヲ見、一時採鉱中止ノ止ムナキニ至」るというアクシデントに見舞われている。しかし、「所員一同懸命ナル努力ニ依リ直ニ之ヲ復旧シ漸次増産ノ実ヲ挙ケツヽアリ」という（「第一二回」）。

すでに「第九回」の報告書より「鉱業報國ノ大精神」なる文言が登場していたが、中国戦線の泥沼化と経済封鎖の実施により、深田銅山等の経営にも深刻な影響が出始めたことは、「第一二回」によって知ることができる。「当期中諸物価ノ昂騰、資材ノ入手難、現業員ノ増員困難ナル上ニ、銅貨ノ据置ガソリン入手難船腹不足ニ依ルトラック及海運賃ノ昂騰等ハ自然鉱石輸送上支障ヲ来シ、業績上不尠障害トナリタルハ洵ニ遺憾トスル所」、と（傍線小松）。

実際、『趨勢』によって判明する深田銅山の鉱夫数は、一九三七年の一九六名から、一九三九年六月末日現在で一三八人、一九四〇年六月末日現在では六九人に激減している。後述する小田定保氏も一九四一年に出征している。同時期の他の炭鉱や鉱山でも事情は同じであったが、こうした減る一方の鉱夫をいかに確保するかが深田銅山の重要課題になりつつあった。

表4　新望銅山株式会社の営業成績（1937～1941）

回	期　　間	鉱業収入 円　銭	雑収入他 円　銭	総収入 円　銭	総支出 円　銭	差引利益 円　銭	伸率
6	1937・6・1～37・11・30	276,318.00	727.69	277,045.69	129,239.78	147,805.91	100
7	1937・12・1～38・5・31	341,928.61	6,567.87	348,496.48	125,574.21	220,922.26	149
8	1938・6・1～38・11・30						
9	1938・12・1～39・5・31			470,903.08	157,064.37	313,837.71	212
10	1939・6・1～39・11・30	442,451.06	55,899.43	498,350.49	169,614.28	328,736.21	222
11	1939・12・1～40・5・31	469,158.84	99,703.95	568,862.79	202,186.16	366,676.63	248
12	1940・6・1～40・11・30			599,205.97	248,084.16	351,121.81	238
13	1940・12・1～41・5・31			671,081.58	295,816.44	375,265.14	254

《備考》第6、7、9～13回営業報告書より作成

このように新望銅山株式会社を取り巻く状況は悪化する一方であったが、それでも、営業成績は割合に順調な発展ぶりをみせている。表4をみていただきたい。一九三七年六月一日から四一年五月三一日までの経営状態をまとめたものである。表からわかるように、収入も利益も順調な伸率で、株主配当金も、第六、七回が一割二分、第九～一一回が一割、そして第一二、一三回が八分となっている。さらに、一九四〇年六月二七日の株主総会では、資本金の四〇〇万円から七〇〇万円への増額が可決されている。

深田銅山に関していえば、第六、七回の報告書の数字は、ほぼ深田一山のみの鉱業収入と考えることができる。また、一九三九、四〇年の分も『趨勢』により判明する（表5参照）。ただ、営業報告書による一九三七年六月一日から三八年五月三一日までの一年間の鉱業収入の合計額は六一万八二四六円となり、これを深田一山の産出価額とみると、『趨勢』の三九年、四〇年の数字よりヒト

表5　新望銅山の鉱産高の推移（1939—45）

（A）

年	銅　鉱（t）	鉱産高（円）	6月末日現在鉱夫数（人）
1939	1,491	28,295	138
1940	859.1	56,984	69

《備考》『昭和14年、同15年 本邦鉱業ノ趨勢』（昭和23年6月刊）より作成。

（B）

年	採　掘　粗　鉱			産　出　粗　鉱		
	乾量（t）	品位（%）	含有量（kg）	乾量（t）	品位（%）	含有量（kg）
1941	4,922	2.50	125,000	1,856	5.20	96,400
1942	5,049	2.60	131,200	2,466	5.0	123,300
1943	9,300	3.5	325,400	5,400	5.50	297,000
1944	4,080	3.2	130,600	1,785	6.1	131,000
1945	4,521	3.7	167,000	2,104	6.3	132,200

《備考》『昭和16年—20年 本邦鉱業ノ趨勢』（昭和26年刊）より作成。
なお、1944年に、1,000t（品位32%、含有量315t）の鉄鉱も産出している。

ケタ多い。このあたりをどのように理解したらいいのか、よくわからないが、さらに、表5Bにまとめたように、一九四一年から四五年までの深田銅山の採掘粗鉱と産出精鉱量の推移をみると、一九四〇年代に入っても産出量が増大し、一九四三年にピークを迎えていることが判明する。鉱夫数が減少し、熟練労働者も少なくなる一方であったろうにもかかわらず、産出量が増大しているのである。このことは、いったい、どのように説明可能なのだろうか。

表5Aに明確なように、一九三九年と四〇年を比較すると、鉱夫数の激減にもかかわらず、逆に出鉱高は急増している。きわめて優良な鉱脈の発見、機械化の進展など様々な要因が考えられるが、確定的なことは「営業報告書」からも『趨勢』からもうかがえない。また、一九四一年以降の鉱夫数は不明である。深田銅山は「重要鉱山」あるいは「準重要鉱山」に指定されていた（『一覧』で判明するのは、一九三三年から三五年まで準重要鉱山、一九三八年から四一年まで重要鉱山、一九四三年に準重要鉱山に指定されていることである）鉱山であったから、朝鮮人強制連行の該当事業所であった可能性も否定できない。この点に関連して、次の小田定保氏の証言が参考になる。

一九二〇年生まれの小田氏は、一七才のときに深田銅山の採掘夫になり、一九四一年に二一才で兵隊に行くまで深田銅山で働いていた。つまり、一九三七年から四一年までの間ということになり、先に紹介した新望銅山株式会社の「営業報告書」の時期と偶然にも重なり合っている。小田氏の話では、当時、従業員は二〇〇名ほどいたが、地元の人は少なく、ほとんどが他所からきた鉱夫だったという。そして、朝鮮人もだいぶおって、いっしょに働いていた、ダイナマイトで岩を崩してから採掘していたが、この発破作業はほとんど朝鮮人がやり、発破作業中の事故で死んだ人もたくさんいた、発破作業で亡くなった朝鮮人の葬式をしたことを覚えている、という。

ただ、小田氏の証言にも、朝鮮人労働者の具体的な数はでてこない。「だいぶおった」ということだけで、実際に小田氏が勤めていた時期の一九三七年＝一九六名、一九三九年＝一三八名、一九四〇年＝六九名のうちのどれぐらいを朝鮮人労働者がしめていたのかは判明しない。ここに朝鮮人の飯場があった、と小田氏が指さした場所を調べてみたら、棟割り長

屋風の建物二棟がやっとという程度の平地だったので、一〇〇人以上ということは考えられず、四、五〇人といった感じを受けた。

しかしながら、人数の多い少ないは別にして、少なくとも一九三七年時点から、深田銅山で朝鮮人労働者が鉱夫として働いていたという事実は重要である。小田氏の話では、一九四一年に兵隊に行ったときも朝鮮人労働者がいたということであるので、これらの朝鮮人労働者は戦時中も深田銅山で働いていた可能性が高いのである。ただ、彼らが強制連行の該当者であったとは考えにくい。なぜなら、強制連行が実質的にはじまるのは一九三九年九月からであることと、中央協和会が一九四二年にまとめた「移入朝鮮人労務者状況調」によって判明する一九三九年度、一九四〇年度の「募集」許可事業所名の中に深田銅山は入っていないからである。このように、小田氏の証言から、深田銅山への朝鮮人強制連行を裏付ける事実を確認することはできないが、少なくとも、それ以前から朝鮮人労働者が存在していたことが朝鮮人労働者の強制連行の阻害要因とはならないことは指摘できるだろう。

おわりに

深水一雄氏らによれば、深田銅山は、一九四四年の水害で壊滅的な打撃を受け休山に追い込まれたという。しかし、『趨勢』によれば、一九四五年も産出高が計上されているので、休山の時期が一九四四年なのか一九四五年なのかははっきりしない。

このように、深田銅山の歴史に関してもまだまだ不確かな部分が多いが、その最盛期には、国家レベルでも一企業レベルでも、かなり重要な位置づけを与えられていた銅山であったことが判明した。しかし、本稿のテーマに即していえば、鉱毒問題に関してはある程度文字史料が残されているものの、朝鮮人労働にいたっては管見の限りでは皆無であり、その空白部分を埋めるのは前途遼遠といった感を否定できない。いったいに、深田銅山の存在する球磨郡は、早くから朝鮮人

労働の展開が見られたところであるが、史料的にある程度実態をつかむことの可能な韓国併合以前の鉄道肥薩線の工事や一九三〇年代の水力発電所のトンネル工事の他は、戦時中の軍需工場関係の地下工場掘削工事といい、球磨川源流に近い梅ノ木鶴と呼ばれる標高一〇〇〇メートル近い山中での炭焼作業といい、高原（たかんばる）と呼ばれる台地の飛行場建設整地作業といい、聞き取り調査では確認できるものの、いずれも文献史料で裏付けをとるにいたっていない。そうした事情が、在日朝鮮人史研究発展の大きな阻害要因になっているばかりか、とりわけ強制連行などの実態を明らかにするのを極めて困難にしているという現実を、最後に改めて強調しておきたい。

注

（1）この点、『深田村誌』には、「免田駅の引き込み線には、時々二、三台の無蓋貨車が別に置かれていて、深田銅山から運ばれて来た銅鉱石が積み込まれていた。ここから大分県の佐賀関精錬所へ送られていたようである。」（三八頁）と正確に記述されている。

（2）「御願」の文面は以下の通り。「私共儀是迄各自ニ於テ所有スル土地内ニ於テ年々粟外種々ナル穀類其他雑産物ヲ作付ケ古来主職トスル農業相営ミ来リ候処凡ソ明治二九年以来五木鉱山ニ於ケル煙毒歳月ヲ追フテ其害ヲ諸作物ニ及ホシ目今ノ状況ニ於テハ将来年一年其被害ノ甚シキヲ免レ難キハ言ヲ俟タサル儀ニ御座候就テハ本年度ヨリ之カ被害料ヲ五木鉱山合資会社ヨリ申シ受ケ以テ一家ノ維持費ニ補塡致度候間何卒前述困難ノ実状ヲ御熟考ノ上右会社ヨリ応分宛ノ義損金配当可相成左様御請求被成下度別紙煙害取調表相張此段連署ヲ以テ奉願候也」（『五木村制百周年記念誌』、一九九一年）。

（3）「深田銅山の同盟罷業」『九州日日新聞』一九一八年八月一四日。

（4）『深田村誌』、一一六〇～六一頁。

（5）以上、『国史大辞典』第六巻の「高田商会」の項目も参照。

（6）「おそくとも」としたのは、「大正一一年七月一日現在」と題する『一覧』に、まだ深田銅山が登場するからである。ただ『一覧』の数字をみると、どうも『趨勢』の一年遅れ、すなわち前年度の産出高を掲げているように思われるので、一九二二年休業説でいいような気もする。

（7）武田晴人『日本産銅業史』東京大学出版会、一九八七年、参照。

（8）「父は、明治生命を辞めて、横浜にあった高田商会という、アメリカ向けの貿易会社に入り、商会が副業として熊本県球磨郡深

田村に経営していた、銅山に赴任することになった。／この銅山は、後に高田鉱業株式会社となって独立し、一時は銅の製錬所までも持ち、従業員五百人近くも働いていた。ところが、海軍軍縮時代に入って、軍需品としての銅の国際価格が下がり、その上銅鉱の埋蔵量も尽きてきたので、経営を漸時縮小することになった。父は、その頃、銅山の所長に任命され、廃山とともにサラリーマンとしての生涯を閉じた。／その後、何の職務にも就かず、他所にも行かず、死ぬまで深田村内山の仮住まいで暮らした。」（田中稔男『夢路点描』一九九四年、非売品、一一一頁）。なお、私は、この本を、田中稔男氏の三女である嬢峨邦子氏よりいただいた。

(9) 前掲『九州日日新聞』の記事。ただ、この記事では、「同銅山は持主転々して委徴振はず久しく休業中なりしを東京高田商会が買収して経営することとなりたるより漸次発展し昨今は使役労働者も／▲四百名に達し居り・・・」とされており、鉱夫の数と全従業員の数を区別している。また、注4でも、従業員数を「五百人近く」としている。なお、森田誠一・花立三郎・猪飼隆明『熊本県の百年』山川出版社、一九八五年、も参照のこと。

(10) 「銅山の歴史の中で、もっとも活気のあったのは、大正時代の高田商会経営の頃であったろう。大正七年（一九一八）の製煉所建設の時の賑やかな催しは、当時六歳であった筆者にもたしかな記憶が残っている。その頃は、従業員も二百人に達し、一日の採鉱量も五〇トンに及んだといわれている。」（『深田村誌』一一四九～五〇頁）。この部分の執筆者は深水一雄氏であるが、「二百人に達し」たとする資料的根拠が示されておらず、また鉱夫と従業員の区別もされていない。深水氏の記憶に基づくものであろうが、「二百人」も鉱夫の数と考えられる。

(11) 『大牟田市史』下巻、一九六八年、『人事興信録』昭和一二年版、上、などを参照。

(12) 同資料によれば、貝谷が深田銅山の採掘・経営に着手したのは、三井合名の圓琢磨の薦めによるとされている。貝谷がかつて三井三池鉱山に勤務していた関係からであろうか。

《付記》本稿を作成するにあたり、次の諸氏・機関にお世話になった。記して感謝申し上げたい。
犬童信義氏、小田定保氏、嬢峨邦子氏、東定宜昌氏、深水一雄氏、吉川友丈氏、国立国会図書館、九州大学石炭研究資料センター、熊本県立図書館。